古文を読むために　3

このコラムでは活用する品詞を解説している。活用を正しく理解することは辞書を引いて語義を調べたり、前後の語を把握して文意を的確に捉えたりする際に有効である。多少遠回りに感じても、生徒によっては各活用形の意味を押さえておくことで理解が進むこともある。その点も簡単ではあるが、解説している。また、コラムにもあるが、各活用形の下に続く言葉を覚えておくことは大切である。一つ一つの語を上下から考えて正しく捉える習慣を付けさせたい。さらに、係り結びについては現代語にはないだけに、考えにくい面もあるが、使われていた当時は読者の注意を引いていたことを心に留めて読む必要がある。

1 活用・活用形

下に続く言葉によって、語形が変わることを活用といい、変化した一つ一つの形を活用形という。ここでは各活用形に固有の用法について解説しておく。

未然形は、まだ実現していない、まだ存在していない事態を表現する活用形である。そのため、後で詳述するが、仮定・推量・打消を意味する語が続くことが多い。

連用形は、用言などに続いていく（形容詞などは連用修飾語として続く）働きを持つ。この働きを連用修飾法という。また、文をいったん中止し、後に続ける連用中止法も連用形の用法である。さらに、動詞の意味に過去・完了というテンスの表現が続いていく際の活用形であり、接続助詞の「て・つつ」が付くのも連用形である。

終止形は、文を言い切る形である。言い切るとは一つの事態を存在するものとして描くことである。そのためある種の推量の助動詞が付く場合があり、逆接の接続助詞「と・とも」が続くこともある。

連体形は、体言などに続いていくもので、連体修飾語となる。また、体言相当になるため、断定の助動詞が続くことになる。接続助詞の「を・に」が付くのも連体形である。さらに、ある種の語に対する結びとして、文末に置かれることもある。

已然形は、未然形に対応するもので、すでに実現した事柄を示し、確定条件を表す助詞が接続する。また、この活用形もある種の語に対する結びとなる。現代語には已然形はなく、同じ位置に仮定形と呼ばれる活用形が置かれている。

命令形は、その名が表現するとおり、命令で文を言い切る形である。また、許容や放任の気持ちを表すこともある。

活用のある語には変化しない部分と変化する部分があり、それぞれ語幹・語尾（活用語尾）と呼ばれる。ただし、語によっては語幹と語尾の区別のない語もあるので注意が必要である。

2 動詞

物事の動作・作用・存在などを表し、言い切りの形がウ段になるものを動詞という。ただし、ラ変の動詞については言い切りの形が「り」となる。動詞の活用は九種類に分けられるが、まず、属する動詞の少ない六種類について、頭に入れてしまうことが、活用全体を理解するうえで近道である。

1　上一段活用　カ行・ナ行・ハ行・マ行・ヤ行・ワ行に現れ

る十数語である。

2　下一段活用「蹴る」一語。

＊　活用が上一段と同形式で規則的なため、一語でも変格活用とはしない。

3　カ行変格活用　来

4　サ行変格活用　す・おはす

＊　サ変には多くの複合動詞がある。

漢語＋す　御覧ず　生ず　死す　信ず

名詞＋す　ものす　あるじす　供す

用言連用形＋す　送りす　尽きす　久しうす

5　ナ行変格活用　死ぬ・往ぬ

6　ラ行変格活用　あり・居り・侍り・いまそがり

＊　ラ変は次のような複合動詞を作る。

さり　かかり　しかり　持たり

他の三種類（四段活用・上二段活用・下二段活用）に属する動詞は、打消の助動詞「ず」を付けることにより見分けられる。

7　ア段の音に「ず」が付くものは四段活用である。

8　イ段の音に「ず」が付くものは上二段活用である。

9　エ段の音に「ず」が付くものは下二段活用である。

＊　四段活用にはア行、ワ行に属するものはない

＊　ヤ行上二段活用は「老ゆ」「悔ゆ」「報ゆ」の三語

＊　ア行下二段活用は「得」「心得」の二語

＊　ワ行下二段活用は「植う」「据う」「飢う」の三語

＊　ザ行下二段活用は「交ず」「混ず」の二語

古語と現代語とを動詞の活用の仕方で対照すると次のようになる。

四段活用 ┐
ナ行変格活用 ├――五段活用
ラ行変格活用 ┘
下一段活用 ――下一段活用
上一段活用 ――上一段活用
上二段活用 ――上一段活用
カ行変格活用 ――カ行変格活用
サ行変格活用 ――サ行変格活用

古文の動詞の活用は必ず同一の行内で行われる。当然歴史的仮名遣いであり、発音通りではないことがあるから、きちんとした五十音図に対する理解が必要である。また、「活用」「活用形」「活用の種類」などの語を正しく使い分けることを心がけたい。

●自動詞と他動詞　その語だけで主語の動作・作用を表す動詞を自動詞といい、表す動作・作用が、他に対して働きかけている動詞を他動詞という。「…が～する」の形の文が自動詞の文、「…を～する」の形の文が他動詞の文である。つまり、他動詞の多くは動作の対象を示す目的語を伴って使われるのである。しかし、日本語では自動詞、他動詞の区別がつきにくい場合がある。元来、日本語の自動詞、他動詞の問題は「受身」と「使役」に関係していると言われている。他動詞は主語がある動作をして、その動作が他の目的に及ぶものだが、使役は自分でしないで他の人にさせるということで、動作主が異なる。しかし、他に影響を及ぼすと

いう点で共通であるとも考えられ、「す」が付くと他動詞になる場合がある。一方、自動詞は「る」が付くことで「自然に…なる」ことを表すことから出来上がったものがある。後の例の5を比較してみると、そのことが分かる。しかし、1〜4の例では自動詞・他動詞の区別がつけにくいケースもある。それでも、主語の推定、文脈の整理など古文の読解上、重宝な点もあるし、語幹の同じ動詞でも活用の行、種類を形の上から見分けることもできるので、可能ならば自動詞・他動詞の区別をしておくのが有用である。

自動詞の文　水　流る
他動詞の文　水を　流す

次に、動詞を自動詞か他動詞かという観点から分類しておく。

1　自動詞だけのもの　行く　走る　死ぬ　老ゆ
2　他動詞だけのもの　打つ　蹴る　着る
3　自動詞・他動詞両方あり、形が同じもの
　吹く　開く　笑ふ
4　自動詞・他動詞両方あり、語形が同じで活用が異なるもの
　育つ（タ四／タ下二）　折る（ラ下二／ラ四）
5　自動詞・他動詞両方あり、語形・活用が異なるもの
　流る　流す　　離る　離す

●補助動詞　動詞が本来の意味を失って、助動詞のように他の語の下に付いて上の語を補助したり、ある一定の意味を添える形で用いられたりする場合、補助動詞という。補助動詞は「あり」「居り」などの存在に関するものや、「給ふ」「おはす」「奉る」などの敬語に関するものなどもある。補助動詞に対する言い方として、普通の用法の動詞を本動詞ということがある。

動詞の活用に慣れるためには、多くの動詞の活用を調べてみることに尽きる。いつまでも未然形から命令形まで活用させてみなければ活用が判断できないようでは、活用の仕方や活用形を知ることが最終的な目的ではない以上、あまり役に立たない。早い段階で動詞の活用については瞬時に判断できるような力を身に付けさせたい。言葉の意味を調べるために辞書を引くときも動詞は終止形で引くわけだから、すぐにそれが浮かばなければ効率が悪いのである。

3 形容詞

形容詞は物事の性質・状態、話し手の感情を表すものである。形容詞の活用にはク活用とシク活用の二種類がある。おおまかな傾向としては、ク活用には状態形容詞が多く、シク活用には感情形容詞が多いということがある。この二つの活用を見分ける方法としては、連用形の後に動詞の「なる」を付けてみる方法がある。「よくなる」「高くなる」など「し」が「なる」の前に入らないものはク活用、「美しくなる」「寂しくなる」など「なる」の前に「し」が入るものはシク活用である。また、「同じ」「いみじ」など基本形が「じ」で終わるものがあるが、それらは全てシク活用である。

●カリ活用　形容詞の活用には連用形「−く」にラ変「あり」が付き、「−く＋あり→かり」と熟合したカリ活用と呼ばれるものがある。これは形容詞本来の活用だけでは、動詞のように助動詞を自由に続けることができなかったため、「あり」を介して助動

詞に続けたものが活用として定着したものである。この活用を補助として、初めて用言としての機能を果たすことができるのである。

4 形容動詞

形容動詞は物事の性質・状態を表し、言い切りの形が「なり」「たり」となるものをいう。言い切りが「なり」となるものをナリ活用といい、これは上代から見られるものである。一方、言い切りが「たり」となるタリ活用は鎌倉時代に漢語に「たり」が付いた形として現れたと言われている。そのためタリ活用の形容動詞の語幹には、同じ語を重ねたもの（堂々・洋々）や「…然」となるもの（平然・泰然）が多い。形容動詞は「名詞＋断定の助動詞」と見分けがつきにくいが、語の前に「いと」を付けて文意が通れば、形容動詞である。

5 係り結び

文は普通、終止形あるいは命令形で結ぶのが原則である。しかし、文中に係助詞の「ぞ」「なむ」「や」「か」があるとき、それを受けて連体形で文を結び、「こそ」があるとき、已然形で結ぶ。これを係り結びという。係り結びは一文の中で成立するものであるから、特に引用を表す「と」「など」が文中にあるときには注意を要する。「ぞ」「なむ」「こそ」は強意の意味があり、「や」「か」は疑問・反語の意味がある。強意を表すものでは、「なむ」→「ぞ」→「こそ」の順に強意の程度が強くなる傾向があり、「こそ」を使う場合は作者の心情が強く表れると言われている。次に、疑問・反語の区別であるが、見分けが難しい場合がある。前後の文脈から慎重に判断する必要がある。ただし、「やは」「かは」の時は反語であることが多い。また、活用語に付く場合、「や」は終止形に、「か」は連体形に接続するが、反語や条件を表す場合などには已然形に付くこともある。「ありやなしや」「あるかなきか」などの例を頭に入れておくと接続は容易に分かる。

また、係り結びが成立しないケースがいくつかある。

1　結びの語で文が終止せずに、主に接続助詞によって下に続けたりすることで、結びがなくなることを「結びの消滅（流れ）」という。

2　結びの語が推測できる場合は省略することがある。

3　「こそ」の結びとして已然形が現れるが、文が終止せず、続いていく場合は逆接強意の意味となる。

係り結びが成立している場合の文の終わり方は異例のもので、それゆえの効果も本来は持っていたのである。しかし、係助詞があってもきちんとした係り結びが成立していない場合もある。あまりこだわりすぎないようにしたい。

（畠山　俊）